

香油を注がれた主 2020

マルコによる福音書 14章3～18節

みなが集うことが難しかったコロナの時期に、手紙という形で遠く離れたところから心を寄せ、教会形成と牧会の勧めを行ったテサロニケの信徒への手紙を読み終えまして、アドベントが始まるまでの間、再びマルコによる福音書に戻ろうと考えています。

今朝、わたしたちに与えられている御言葉は、主イエスが十字架にかかる二日前の出来事。すでに祭司長や律法学者たちは何とかして主イエスを捕えて殺そうとはかっており、十字架へのカウントダウンが始まっている。そんな折に起こされた出来事です。このベタニアで香油を注がれるという出来事は生前の主イエスが受けられた最後の暖かい、真心のこもった行いでした。そして主イエスが仰られた通り、このひとりの女のした行いは、福音の語り伝えられるかぎり、記念として、また信仰の応答とは何かを伝える出来事として輝き続けています。今朝はここからご一緒に御言葉に聴いてゆきます。

この出来事が特別なのは、イエスさまがここでキリストとしてお披露目をされたことです。ちょっとおかしい言い方ですね。ユダヤでは、油を注がれた者をメシアと呼びます。このギリシア語訳がキリストとなるのです。王や、祭司などの任職の時に油が注がれます。これは神が立てた特別な職務、働きへの召しでありました。それを今、イエスさまに対して、一人の女性がなしたのです。非常に純粋で、高価なナルドの香油を容器ごと持ってきて、それを砕き、すべてを主イエスの頭に注いだ。食卓だけでなく、家中がよい香りで満たされたでしょう。十字架にかかれる二日前のことです。イエスさまがここに来るまで

何度もなさってきた受難の予告がありました。ペテロがあなたはメシア、生ける神の子です、そう告白してより、主イエスは、そのメシアは必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥され、人々の手に引き渡され、殺され、三日目に復活する、と語ってまいりました。メシアとして受けた働きは、必ず苦しみを受けて殺されることだと宣言されたのです。ここでその予告の一部が成就している。ひとりの名もない女によって薫り高い油を注がれて、メシアが人々の前に誕生した。このことを主イエスは、遺体にも香油を塗る習慣があることから、前もってわたしの葬りの支度をしてくれた、この女の行いを責めるな、そうその場で仰って、この女の行いを喜ばれたのです。この出来事の意義は第一に、主イエスの十字架のメシアとしての支度が整えられたことにあります。

次に見ておきたいのが、この女のしたことがそこに居合わせた何人かの人々からは厳しく咎められたことです。何が問題だったのでしょうか。無駄遣いをした、と言われたようですが、無駄遣いとはどういうことを指すのでしょうか。彼女は自分の自由になる最上のもの、一番高価なものを、主イエスにささげ尽くすことによって、その愛を示したのですが、理解されなかった。かえって責められてしまった。どう考えたらよいのでしょうか。この出来事の舞台となったのは、ベタニアというエルサレムから8キロほど離れた村です。エルサレム滞在中の主イエスの宿はこのベタニアであったようです。その村の、重い皮膚病の人シモンの家が舞台です。食事の席についておられた主イエスにひとりの女が近づいた。おそらくこの女には主イエスへの言葉に尽くせぬほどの感謝の思いがあり、それが純粹で非常に高価なナルドの香油をもってきて、石膏の壺を壊し、全部を頭に注ぐという行為になった。ふつう、こういう香油はしずくで使うのだそうです。香水なんかも数滴を手首や、首筋のあ

たりに使うとほんのり香ってくる。それを全部一度に使い切ってしまった。こういう文化はやはり水が十分に使えない地域で発達したものだと思います。ナルドの香油は非常に高価なものであり、それをしずくどころではなく、全部を注いでしまったものですから問題になった。無駄じゃないか、もったいない。300 デナリオンで売って貧しい人々に施せたのに。そのように女の行いを厳しく咎めた者たちがいました。愚かな行為だというのでしょうか。もっと良い使い道があったはずだ。貧しい者にほどこせば生きたのに。そういう言い方で責めた。この 300 デナリオンという額ですが、1 デナリオンが労働者の一日の平均賃金といわれますので、1 日換算なら労働者 300 人分、労働者一人ならほぼ 1 年分の給料にあたる価値があるそうです。それほどの宝を、この女が一度に使い切ったのは、おそらく何か非常に大きな癒しや、赦しの出来事を体験し、そこに示された主イエスの深い愛にただただ応えたかった。それが自分の宝をささげる。自分自身を捧げるという感謝の行いになって現れたということでしょう。しずくをたらしたのでは表せない感謝の思い。すべてをそそぐことによって、まったき献身を示した。「純粋で非常に高価なナルドの香油」と表現されていますが、それはこの女の主イエスに寄せる思いが非常に純粋であり、自分自身をささげても惜しくないほどに主を値高く見ていたということなのです。それが一度きりに香油を使い切ってしまうという並外れた使い方になって現れた。ここに彼女の愛がある。主の愛を注がれて作り替えられて、愛する者へと変えられた女の行いがある。本来、神さまの愛、そして主イエスの恵みに応えるのに、これだけ捧げたから無駄遣いしたということはないはずです。神はわたしたちのために独り子を与えてくださった。主イエスも、わたしたちのために十字架に命を置いてくださることをいとわなかった。進んで、十字架に命を置いてくださった。

この恵みに対して、どう応えて生きるかということ、このベタニアの香油の出来事は、わたしたちにも問うている。そうしてなされた応答の行為が理解されない、神さまのために、イエスさまのために最上のものをささげようとするわたしたちの行いはしばしば理解されないものであることを思います。献金の場合もあるかもしれません。時間をささげることもありません。自分に与えられた賜物を生かして主に仕えること、自分の人生のもっともよいものをささげる働きを神さまが喜ばれないことがありますか。そんなことはない。わたしたち、主に贖われた者の応答が感謝の働きとなって、ささげる働きとなって。主に向かっているか、主が、わたしを、ご自分の命で贖うほどに高く見てくださったから、主がわたしたちに命を分かち与えられたように、わたしも自分の時間としての命を、能力を、財産を、分かち合い、ゆずりあい、学びあいに用いて、主の後に従う感謝の応答へ導かれてゆく。これこそ永遠の命につながる道ではないでしょうか。新しい命の道ではないでしょうか。

このとき、この女のしたことを責めた者たちは、この世のスケールで生きている。神さまが視野に入っていない。主にささげるもの、神さまに対して捧げるものに無駄があるはずはない。厳しくとがめた人たちの意見は、貧しい者たちを引き合いにだし、一見、正論に見えるところが厄介です。彼らは、主イエスを女のように愛していない。そして自分たちの愛のなさを、貧しい者を引き合いにだし隠して女を責めた。おそらく、愚かな女が愚かな行いをした、勿体ないということではなかったか。けれども愚かに見えない愛の行いがあるのでしょうか。キリストが、神の子が、わたしのために十字架にかかること、メシアが必ず苦しみを受けて殺される側に回られることは愚かなことではないのか。この愚かな、まことに不釣合いな行いによって、それが取引でも打算でもなく、愛の行いであったことが分かる

のではないのでしょうか。むしろ、わたしたちはここから愛の愚かさを学び、無理解で責められることを忍びたいと願います。神さまは、主は知っていて下さるのですから。この女は食卓の席で彼女の宝をささげた。それは献身のしるしです。こうした行いはしばしば馬鹿げたものに見える。まわりからは理解されない。しかし、わたしは、神さまとわたしの秘密というのは、あると思いますし、そういう関係を神さまと結ぶことが大切だと思いますね。わたしたちも大切な人のためにはお金を使いますし、それを惜しいとは思わないでしょう。人と比較するのではなく、神さまと自分の関係を問うてするもの、義務感ではなく、まして打算でするものではありません。主がわたしたちのために何を成し遂げてくださったのか、そこへ心に向け、顧みて、わたしたちの歩みを悔い改めと感謝の応答を大胆にささげること、そこから新しい命の道が開けてゆくのではないのでしょうか。自分自身も思ってもみなかった神さまに喜ばれる新しい記念となるような働きが起されてゆくのではないか。ベタニアで香油を注がれた出来事は、こうして十字架にかかれる主イエスに手向けられた心づくしとなった。そのことがわたしたちの心にも慰めを与えるメモリアルとなっている。あえて、この女の名前を記さなかった福音書記者マルコの思いを見て取りたく願います。愛のわざは自分の名誉を求めない。神さまだけが知っていて下さればよいことだからです。

お祈りいたします。